

## 患者の心に寄り添う看護

私がやっていきたい看護は、患者の思いに気づきその思いに応えていく看護である。

小児実習で低酸素性虚血脳症のAちゃん(3歳)を受け持たせてもらった。生後4か月の頃、心肺停止状態となり緊急搬送され、蘇生したが急性呼吸循環不全に起因し、低酸素虚血性脳症と診断されたAちゃんは心電図モニターや人工呼吸器につながれ、言語的コミュニケーションがとれない状態であった。今まで言語的コミュニケーションを取りながら、病気の回復を援助する看護を学んできた自分にとって、目の前のAちゃんに対し「自分には出来ることは何もないのではないか」という思いに駆られた。プライマリーナースから、Aちゃんは嬉しいと「あーうー」と話してくれる。看護技術だけが看護ではないと教えてもらい、日々の生活の中で喜びを見つけてもらえるような関わりを探し、寄り添うことから始めた。

毎日ベッドサイドへ行き、声をかけ、体をふくことや手をつないで温もりを感じてもらいながら非言語的関わり大切さを感じることが出来た。リトルマーメイドの曲を流すとほんの少し頬を動かし表情が穏やかになることや、全身状態以外の変化にも気づくことが出来た。また、Aちゃんは入院してから病院の外に出たことはなく、外の世界を知らないことを知った。そのため好きなリトルマーメイドの曲を流し、「これがお湯だよ、ほら浮いてるね。海はね浮くことができるんだよ。こうやると泳いでるみたいだね」と声をかけながら海に見立てて足浴を実施した。すると「あーうー」と初めてAちゃんの声をきくことが出来た。湯につかっているAちゃんは笑っているように見えた。声は一回しか聞くことは出来なかったが、Aちゃんが何か私に伝えようとしてくれていることがわかり、言語がなくても心を通じれる看護があることを実感することが出来た。

Aちゃんとの関わりを通して、例え自分にできることがすぐ見つからなかったとしても、決してあきらめてはいけないことを学んだ。そして、患者の立場や気持ちになって考えることや、自分ひとりで看護をしようとするのではなく、仲間や現場のスタッフと力を合わせて、患者にとって今何が一番必要かを考えながら看護を実践していくことの大切さを学ぶことが出来た。ひとりで思いつめて立ち止まるのではなく、仲間と話し合い意見をぶつけ合うことや、先生に導いてもらえたことで、患者本位の看護を行えることができた。患者の思いに気づき、その思いに応えていく看護が行えるように、仲間と協力し支えあい、患者の心に寄り添う看護を行っていきたい。